教育

教育に関するご意見や情報をお寄せください
社会部教育班
電話
098(860)3552
ファクス
098(860)3483
※火・木・金曜日に掲載します。

15歳の春 島を離れる日

オキナワ 子どもの今 □7□

県内には、約160の島があり、そのうち49が有人島です。離島の状況はそれぞれで、課題も異なりますが、子どもを含め人口が少ないことが多くに共通しています。有人島の30に小中学校がありますが、そのうち26には高校がなく、就職先も少ないため、中学卒業後は島を出る子がほとんどです。2007年度でみると中学卒業433人が中学校のある島以外へ就職・進学しています。島の子どもたちは、15歳で古里を離れることを迫られます。そして進路選択が、島の将来の姿に反映されることもあるのです。

（社会部・安里真己）

離島・へき地

親の経済的負担重く

アキミは昨春、1歳違いの姉が高校進学のために島を出るのと一緒に、母親と小学生の妹と4人で本島に引っ越した。母親も島出身で、高校時代は兄とアパート暮らしだったが、「昔とは時代が違う。娘を一人で本島に出すなんて、とても考えられない」。父親一人が島に残った。

アキミは、幼いころからずっと一緒だった島の友達と、同じ中学を卒業したかったが、父親に「お母さんがいないと、お父さんじゃ相談にのれないこともあるよ」と説得された。父親は「本島に頼る親類はない。わが家にはほかに選択肢はなかった」と話す。アキミは、最初は、知らない人や車の多さに一歩外に出るにも緊張し、大規模校に戸惑い「島に帰りたい」と言い続けたが、今は本島の生活に慣れ、学校も楽しくなってきた。

しかし、両親の経済的負担は重い。小学生の娘が帰宅するまでに戻ろうとすると母親のパート代は家賃にも満たず、生活費は父親が島から送る。とりわけ、アパートを借りる費用や家財道具や娘たちの制服、学用品の準備に「最初に使った額は、100万円を超えたのではないか」と母親。今でも、貯金を取り崩すことがあるが「最初だけでも、何か補助があればもう少し楽なのに。しっかりした寮があれば、下の娘たちと島を出る必要もなかった」と、ため息をついた。

県内の高校では、離島やへき地の生徒のための寮が石垣市では全3校にあり、本島北部は4校と合同寮が一つある。那覇南部は4校に寮があるが、難関校だったり、商業・農業系がなかったり、本島周辺離島から、寮が利用できない場合も多い。最近は、アキミの家庭のように、母親が下の子も連れて島を離れ、父親が島に残り、二重世帯になるケースが増えている。

小中学生が畑の手入れから収穫、調理まで一緒に取り組んだ。中学生たちは小学生が食べ物を取りやすいよう手助けしている＝2月、渡嘉敷小中学校

■収穫の喜び

渡嘉敷島の富山清林さんは、元教員で、かつて高校進学のために村の寮を本島につくろうと活動したことがある。「せっかく進学しても、退学してしまう子がいた。親が近くで監督できたらいいが、経済的に大変だ。将来に向けた大事な時期に、ちゃんと学校に行けるよう、どうにかしたかった」と振り返る。当時は実現しなかったが、今でも寮設置をあきらめていない。

富山さんは、渡嘉敷・阿波連の両小学校で稲作指導もしている。種籾を海水に漬ける選別など、作業の意味や手順を丁寧に教える。「米作りを通して島を知り、成長して戻ってきて。できたら米を作って」と願いを込める。子どもたちに、島への愛着や自立できる力を持たせるのは島の大人たちの願いだ。

渡嘉敷小中学校は、地域行事への積極参加のほか、稲作など農業体験を積極的に取り入れている。校内の畑を子どもたちが手分けして手入れし、汗して働く尊さと収穫の喜びを体験する。2月のある日、学校の畑からの収穫を味わう「愛汗祭」が行われた。全児童生徒が6班に分かれ、班ごとに自分たちで献立を決め、必要なものを買い、足りない調理器具を持ちよって調理し、職員も交え全員で試食会をした。小柄な小学1年生もタネを丸めてコロッケを作ったり、カレーの鍋を混ぜたり真剣だ。中学生もさりげなく、小学生への気配りを見せながら、一緒に料理を仕上げる。生徒たちは、島の思い出を胸に刻んでいく。

「デザインを学びたい」「医者になりたい」「商業系の資格をとりたい」。希望を胸に3年生はもうすぐ巣立つ。彼らの将来が島と重なるのかどうか、彼ら自身もまだわからない。

■先生の存在

八重山の離島出身のマミ(22)は、古里では同級生がいない時もあった。石垣島の高校の寮で暮らした3年間で、島とは違う先輩との上下関係や生活の仕方を学んだ。島では、先生の存在が大きかったと話す。「友達みたいだったり、すごくいっぱい教えてもらったり。あんなふうになりたい」。今、本島の大学で、教員を目指している。

島の学校では、稲作や海の生き物を地元の人に学んだり、追い込み漁や銛を使った漁も体験した。学校と一体になった地域行事で伝統舞踊を幼いころから舞ってきた。「自分の体験が素晴らしいということが、本島に来てわかった。古里を誇りに思う」。ほかの島をめぐり、その土地のすばらしさに触れることもあった。母校や周辺の離島の子どもたちを前に教壇に立つ日を夢見ている。（本文中は仮名）

＝金曜日掲載

減少する島の子ども

都会から移住・留学も

離島やへき地の子どもの数は減ってきているが、少人数であることや豊かな自然に魅力を感じて移り住む若者や親子、山村留学の子どもたちもいる。

渡嘉敷島では、本年度から坂田竜二さん・明子さん夫婦が里親として山村留学「わらびや」を開いている。県内外から小中学生7人が自然体験するために集い、共同生活をしている。掃除、洗濯はもちろん、農作業をして、自分たちが食べるものを作る。

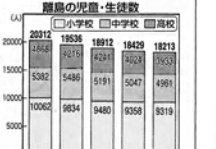
コメはほぼ自給自足で稲刈りも機械を使わず手作業だ。魚や貝をとったり、野菜を育てたり、近所からおすそ分けをもらったり。自然そのものと人とのつながりを子どもたちも楽しんでいる。

ある母親は子育てのために島に来た。「都会では危険で、自由に遊ばせることができない。でも、ここでは自由に遊べて、子どもも喜んでいる」と話す。

学校の行事に地域のお年寄りも参加したり、地域に出て行くＰＴＡ活動も気に入っているが「子どもがもっと大きくなったら、大きな学校の刺激が必要かも」と、いつまで島に住めるか、少し悩んでいる。

大規模校で子どもが不登校になり、落ち着いて通える環境を求めて小さな学校にたどり着いた親子もいる。「大きな学校では一人一人の子どもの存在の重さを学校が感じてないように思い、学校が怪物に見えた。ここでは、子どもがのびのびと過ごしている」と母親は話している。

離島の児童・生徒数



私の提言

琉球大学教育学部准教授（へき地教育専門）

山口　剛史さん

自立と「誇り」身につけて

―離島・へき地が抱える課題は。

いくつかある。高校進学のために古里を離れる「15歳の春」に向けて自立しなければならないこと。複式指導や学校の統廃合をめぐること。それから、新しく入ってきた住民が、全体の半数近く、あるいはもっと増える状況が多くの島で起こっている。ある意味、沖縄本島で起こっていることが、離島ではっきり見える。

―「15歳の春」とは。

親元を離れる中学卒業までに基本的な生活リズムを確立し、進路設計を考え、金銭感覚を身につけ、精神的にも自立して、島を出て生きていく力を身につけなければならない。学校と生活で大きなギャップが生じるのでそれをクリアしなければならない。そのための教育が重要になる。

―離島・へき地で子どもが育つことの意味は。

大きな学校では、一人一人が埋没し、自己肯定感を育てにくい。現状は、救われないカリキュラムや忙しさになっている。だからこそ、個人が大事にされることや街にない豊かな自然が気に入って、山村留学や移住があったりする。実際に、離島に来て救われる大人や子どもたちがいる。「教育の原点はへき地」という言葉が生きている。

―移住者が増えるとどうなるのか。

地域の産業や人口構造によって、現れ方は大きく違う。うまくいっている例も多いが、当たり前だった学校と地域行事の一体化に、移住者が疑問を示したり、もともとの住民との関係がうまくいかなかったりする場合もある。

しかし、子どもはそこで育つので、個人の多様性を尊重しながら、子どもを媒介に地域のコミュニティー（共同体）を編み直し、みんなで文化をつくっていくことが大事になってくる。そのとき、教員は、すべてというわけではないが、授業だけでない役割を持ち、その中心を担わなければならないだろう。

そして子どもたちに、アイデンティティーの基礎を築くことが重要。「この島が絶対」というのではなく、祭りに参加したり、自分が地域に支えられていることを知ったり、伝統文化や言葉、歌を知っていることに自信や誇りを持つことで世の中に向き合う力をつけ、沖縄や日本を相対化できる力をつける。それと「15歳の春」にむけた精神的自立の両方の教育が大事になる。

実際に各離島の学校の、体験学習や文化性を大事にした取り組みは意味のあること。伝統行事に学校で取り組むことには意義がある。教師も一緒に地域行事に参加する中で、子どものアイデンティティーをはぐくめるのではないか。都会に順応することだけを目標とせず、自分の地域を大事にすることを、参画しながら学んでほしい。そしていずれ、島をつくる人材として、島に帰ってくることも選択肢としてもってほしい。このような取り組みを学校、地域が共同してすすめることが大事となっていくだろう。

21、22の両日、那覇市の沖縄大学で「第55回子どもを守る文化会議・沖縄集会」が開かれます。この連載では、集会に向けて毎回テーマごとに県内の子どもたちの現状を見つめます。集会のホームページは、http：／／www.kodomo.libre-okinawa.com／